

## [研究ノート]

せんがい

## 仙厓筆「聖徳太子像」について

当館所蔵の「聖徳太子像」は、仙厓には珍しい聖徳太子を描いた作品です【図1】。柄香炉を持つ聖徳太子が目を閉じて、静かに物思いにふけります。こうした柄香炉を執る太子は、病気になる父・用明天皇を看病する姿をあらわしており、一般に「孝養像」と呼ばれます。現在では、聖徳太子といえば「唐本御影」（紙幣に描かれる太子像）に代表される、笏をもった摂政太子のイメージが強いですが、これは近代に流布したイメージで、近世以前は孝養像やあるいは南無仏太子像が広く認知されていた姿でした。

孝養像の太子は、袍と呼ばれる衣に袈裟を着け、髪も美豆良に結うのが通例ですが、本図では狩衣のような衣に、髪も頭頂部がやけに濃く塗られ、まるで頭巾をかぶっているように見えます。袴も大きく膨らんだ指貫袴の姿で、手に執

る柄香炉も見方によっては小植にも見えてきます。聖徳太子というよりは、いかにも大黒天を想起させる姿です。おそらく大黒天のイメージをもって太子に見立てたものでしょう。

絵の上部には、「太子所創／以為祇林／見其額字／釈迦如来転法輪所当極楽土／東門中心」との賛があり、顔の右側には「厓弁」の落款があります。この「釈迦如来～東門中心」の額字というのは、大阪・四天王寺の石鳥居扁額に記されるものです。「太子所創以為祇林」というのは四天王寺のことになりますので、この賛文は「太子が創建した祇林(寺院=四天王寺)の扁額の字に「釈迦如来～東門中心」とある」という意味になります。

四天王寺は、推古天皇元年(593)に聖徳太子によって創建された寺で、聖徳太子信仰の霊場として古くより厚い信仰を集めていました。四天王寺の信仰史上において大きな画期となったのが、寛弘4年(1007)の『四天王寺縁起』(国宝・四天王寺蔵)の発見です。同寺の金堂より発見されたこの『縁起』は、全面に26の手形が捺されていることから「御手印縁起」とも呼ばれ、太子真筆と信じられて崇拝されます。そして『縁起』に書かれる内容は、太子の言葉を直に伝えるものとして重視されま

た。この『縁起』の中に、「其処昔釈迦如来転法輪所／宝塔金堂相当極楽土東門中心」[この(四天王寺の建つ)場所は昔釈迦が教えを広めたところであり、(四天王寺の)五重塔と金堂は極楽土の東門の中心にあたる]との一文が記されており、これを根拠にして四天王寺が極楽浄土の東門=入口であるという浄土信仰が生まれます。四天王寺は上町台地の高台に位置しており、水平線に沈む夕陽を一望できる立地を活かして、境内の西側の西大門のエリアが浄土信仰の道場として整備されました。折しも世は末法到来の不安の中にあり、「浄土への入口」であるという太子のお墨付きを得た四天王寺には、極楽往生を求めて貴賤を問わず多くの人が参詣に訪れたのです。

この西大門の先に建てられた鳥居(建立当初は木造で、1294年に現在の石造に改修)【図2】の扁額【図3】に刻まれたのが、先の『縁起』の一文からとった「釈迦如来、転法輪所、当極楽土、東門中心」になります【図4】。この鳥居は、「一遍聖絵」や中世以降の聖徳太子絵伝にも描かれるなど【図5】、四天王寺をあらゆるシンボルとして広く認知されていました。

仙厓義梵(1750～1837)は江戸時代後期の禅僧で、美濃国の農家に生まれ、空印円虚・月船禅慧のもとで修業したのち、40歳にして福岡の臨済宗の名刹・聖福寺の住持となって荒廃していた同寺の再興に尽力しました。文化8年(1811)に弟子の湛元等夷に聖福

寺の法席を譲ると、山内の虚白院に入って隠棲し、本格的な絵画制作を始めます。特に70歳の老齢に入ってから、「厓画無法」[世の中の絵画には法があるが、自分の絵画には法が無い]の精神に基づいて、自由闊達な書画作品を数多く残しました。

仙厓は本作品の他に、四天王寺の景観を描いた「天王寺図」(福岡市美術館蔵)や、鳥居の額字を書いた「四天王寺額書」(天保元年(1830)・出光美術館蔵)などの作品を残しています。文華館本のように聖徳太子を描いていても四天王寺に絡めた作品が多いことを考えれば、太子への信仰というよりは四天王寺との関わりの中で一連の作品が制作されたものと思われる。仙厓と四天王寺と関わりを示す直接的な資料は管見の限り見出せませんが、福岡市美術館本では石鳥居から眺めた伽藍を描いていることから、仙厓が四天王寺を訪れたことがあるのは確かなようです。仙厓は聖福寺に入る前の30代の時代を諸国行脚に費やしており、京都・滋賀も巡っていますので、大坂へ足をのびたことも十分考えられるでしょう。福岡市美術館本は70代、出光美術館本は81歳の作でいずれも老齢に入ってから作品ですから、若かりし頃に訪れた四天王寺のことを思い浮かべながら制作したものかもしれません。(一本崇之)

※図2～4は四天王寺提供。図5は筆者撮影。



図1 「聖徳太子像」



図2 四天王寺の石鳥居



図3 石鳥居扁額



図4 扁額額字



図5 聖徳太子絵伝(四天王寺蔵)部分

季刊 美のたより No.224

令和5年9月29日

発行 大和文華館